



平山長雄 氏



No.305 平成24年9月15日発行
 編集・発行 連合駿台会
 広報委員長 齋藤柳光
 〒101-0052 千代田区神田小川町三三二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三三) 三二九六一四七四七
 FAX (〇三三) 三二九六一四七四八
 印刷 有限会社 美創

連合駿台会七月例会

「橋下報道の現場から」

朝日新聞編成局長補佐 平山長雄氏

連合駿台会平成二十四年七月の例会を、七月十八日(水)十八時より、明治大学「紫紺会」三階会議室で、平山長雄氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、山口政廣会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

総会も無事終了し、新体制で運営されているが、早速、各委員会が活発に動いている。従来のやり方にとらわれない意見と問題提起をしていただきたいということで、本年度より運営委員会を設置し、その第一回を六月二十四日に開催した。連合駿台会も発会から八年がすぎたので、二年後の十周年を目指して、会のあり方や財政問題も含め、大学支援はどうあるべきか、会の活動を活発化するにはど

うすべきか、などといった基本的なこともご検討をお願いしたいと思っている。

地下資源が枯渇してきて、しかもレアメタルの問題もあり、日本の産業が非常に難しくなってきた。技術が進んで海底調査が進み、試掘ができるようになったことなどで、海底資源というものが意外と豊富であることがわかってきた。これは今後の日本を考えたとき、大切な問題になると思うので、少しお話しさせていただきたい。二〇〇八年十一月、日本が自国の領海として提起していた申請が、四月二十七日に国連の大陸棚限界委員会で認められた。日本の国土面積は三十七万八千km²で、国連加盟国中では六十位くらいの広さであるが、いま日本が認められている「排他的経済水域」(領海の外側に海岸の基線から測って二百海里までの水域)は四百四十七万km²で、国土の十二倍近くになる。「領海」とは、領土から十二海里(二十・二km)までだが、それ以外に大陸棚を認めると、沿岸から自動的に二百海里、場合によっては三百五十海里までは認めるといふことが、国連海洋法条約で決められている。日本はそれに目をつけ、申請していたわけだ。

当初申請したのは七十万km²で、今回認められたのは三十一万km²だが、それでも国土に匹敵するほどの面積になる。ここでネックになったのは、沖ノ鳥島で、ここはハワイ諸島

よりも南（北緯約二十度）に位置するが、これも日本の大陸棚の延長だと申し入れた。しかし中国と韓国は、あれは島ではなく岩であると主張している。というのは干潮時には環礁の大部分が海面上に姿を現すが、満潮時には東小島と北小島と呼ばれる二つの島が十数cmほど残るだけで、他は沈んでしまうからである。そこで日本はここに三百億円ほどを投資し、周囲に防護壁を設置して崩れないようにした。ここが日本の領土だということは認められているようだが、今回の排他的経済水域という範疇では、中国と韓国の反対で残念ながら外されている。これが認められると、四十万km²が新たに追加されることになる。

ではなぜ日本がこれを大切にしないでいけないかというと、もちろん資源の問題もあるが、排他的経済水域には漁業権も絡んでくるので、今後の日本の漁業を考えるうえでも看過できない。また対中国政策の面でも、軍事的な問題も含めて、権利を確立しておくことは重要だ。この開発が急がれるところで、今年度予算では、四国沖や秋田沖の日本海でも試掘が始まっているが、海域なので必ず国際問題に関わってくる可能性がある。そう考えると、日本単独で行うだけでなく、アメリカやカナダ、あるいは友好国と連携して行い、軍事的問題になつとき、一際に対応できることを考えた開発も必要かと思う。

当日の講演の要旨は以下の通りです。

*

この六月に東京本社へ異動するまで、大阪本社で社会部長をつとめた。約二年の任期中に取り組んだ大きな仕事は二つある。大阪地検特捜部の証拠改竄（かいざん）事件と、大阪府知事から大阪市長に転じた橋下徹氏をめぐる一連の報道である。いずれも、メディアに変革を迫る大きな意義を有していた。

大阪地検特捜部検事によるフロツピーディスク（FD）の改竄事件は、朝日新聞がスクープした。きっかけは、障害者団体向けの郵便割引制度が悪用された郵便不正事件で、実はこれも朝日新聞の東京社会部が端緒をつかみ、調査報道によって不正の実態を明らかにした。キャンペーン報道の過程で大阪地検特捜部が捜査に乗り出し、厚生労働省が偽の証明書を発行した疑惑が浮上、担当課長だった村木厚子さんが逮捕・起訴された。

検察との全面対決を覚悟

その後の公判で検察のさまざまな捜査が次々に明らかになり、村木さんの無罪が確定した。「冤罪の片棒を担いだ」としてメディア、とくに朝日新聞は厳しい批判にさらされた。判決を載せた一昨年九月十一日付の朝刊で、朝日新聞は無罪となった村木さんの事件について、検証記事を大きく掲載した。私はそこに社会部長として「検察をチェックでき

たのか、捜査情報の裏付けは十分だったのか。その批判には謙虚に耳を傾けたい」と書いた。

検証記事の掲載にあたり、検察担当の記者には、取材手法に問題がなかったかどうかを聞いた。記者らは検察関係者を丹念にまわり、いわゆる「夜討ち・朝駆け」取材を続けて共犯者らの供述を聞きだし、捜査を先取りするかたちで連日報じていた。他紙との競争でも負けていなかった。

だが、その後の公判で、記事のもとになった供述調書の大半が「検事の作文」として証拠採用されなかった。まさかそんな事態になるとは「想定外」だった。社会部長論文の結びに「今後も捜査の問題点を解明することが、読者の期待に応えるものと考え」と書いたのは、取材の山場を迎えていた証拠改竄事件を何ともして世に出さなければ、という強い思いがあったからだ。「このままでは読者に見放される」との危機感があった。

改竄されたフロツピーディスクは弁護士のもとに返却されていた。それを入手し、民間の調査会社に鑑定に出した。証拠品として検察に押収されている期間に人為的にデータが書き換えられたことを突き止めた。準備はできた。あとは鑑定結果をどう検察につけて紙面化するか――。

十年前、検察の調査活動費の流用疑惑を

告発しようとして現職の大阪高検の部長が大
阪地検特捜部に逮捕される事件があった。組
織防衛のためには手段を選ばない怖さがあっ
た。担当記者の身柄を拘束したり、取材資料
を押収しようとしたりしないか。リスクを考
えれば切りがなかった。資料を社内から別
の場所に移すことも考えた。検察と全面対決す
る腹を固めて「検事、押収資料改ざんか」と
朝刊の一面トップでスクープしたのが無罪判
決から十日あと。その日のうちに最高検が動
き、特捜検事を証拠隠滅容疑で逮捕したのは
驚きだった。

実感した読者との距離

改竄事件でキャンペーン報道を続けるに
際し、取材の経緯も含めて読者への説明責任
を果たそうと申し合わせた。翌年、「証拠改
竄 特捜検事の犯罪」を出版したが、検察関
係者から端緒となる情報を得た場面も含め
て、取材源の秘匿をおかさないうりぐりの範
囲まで内幕を明かした。記者の日頃の仕事の
様子や心のうち、苦悩や怒り、後悔も書き
込んだ。そこまでしなければ、「検察と癒着
している」「リーク情報で記事を書いている」
などという読者の根深い不信感を払拭できな
いと考えたからだ。

この事件を通じて感じた読者との距離を、
昨年の大阪ダブル選を中心とする一連の橋
下報道でも痛切に感じた。

橋下氏は圧倒的な影響力をもつ政治家だ。
たとえば彼のツイッターは八十万のフォロ
ワーがいる。芸能人・タレントを除けばソフ
トバンクの孫正義氏、ホリエモンこと堀江貴
文氏に次ぐ第三位で、朝日新聞の大阪府内の
読者数に匹敵する。まさに彼自身が一つのメ
ディア、自ら情報発信することができる存在
である。

その彼の発言や行動、府政や市政の諸問
題を様々なかたちで報じていくのだが、何を
どう書いても読者から真逆の反応がある。

「なぜ橋下氏の足を引っ張るのか」「決めつ
け、偏向報道ではないか」という声はまだわ
かる。発言や政治手法、また、橋下氏が代表
をつとめる「大阪維新の会」の政策を検証
し、その問題点を指摘することが多いから
だ。しかし、そうした批判以上に「朝日は橋
下の宣伝機関か」「維新の会の話を垂れ流す
のはいいかげんやめろ」といったお叱りが殺
到するのである。

戸惑うのはこればかりではない。取材現
場は、これまでメディアが経験したことな
い想定外の事態が日々進行している。

橋下氏はほぼ連日、メディアに向き合い、
記者からの質問に答えている。大阪府や大阪
市の記者クラブに属している一般紙、テレビ
はもちろん、週刊誌や外国メディア、政党機
関紙の記者もいて、何を聞こうがいつこうに

かまわない。ただ、その様子は大阪市側
よってビデオカメラで撮影され、ユーチュ
ーブなどにアップされる。記者の姿は映らず、
やりとりの音声だけだが、全世界に流れる。

私が若いころ、先輩記者から「記者会見
では質問するな」「聞き役に徹して相手の手
の内を探れ」と言われたものだ。役人がつく
る知事や市長の発言内容、想定問答も事前に
入手し、会見に先んじて報じることも多かつ
た。だが、橋下氏の場合、想定問答などは一
切なく、何が飛び出すかわからない。時には
橋下氏から記者に逆質問があり、面と向かっ
て「勉強不足」と批判されることも珍しくな
い。会見というよりデイベートの場であり、
記者の緊張感は相当のものがある。

今年五月、ユーチューブ上で、橋下氏と地
元民放の女性記者とのやりとりが大きな話題
となった。学校行事で教職員に君が代の起立
斉唱を義務づける条例をめぐるやりとりだ。

記者が市教委の職務命令などについて質
問したのに対し、橋下氏は「起立斉唱の命令
は誰が出したのか」とその命令主体について
逆質問し、「この場合は議会ではない。答弁の
義務だけを負っているわけではない」と回答
を迫った。記者がそれにやや窮すると「勉強
不足」とキレ始めた。最後にこの記者が半ば
あきれ気味に「このへんにしておきます」と
やりとりを終わろうとすると、橋下氏は「何

ですか。失礼な言い方は。吉本新喜劇でももう少し丁寧な応対をしますよ」と激怒した。この約十五分のやりとりに対して数百万のアクセスがあり、女性記者に対して「無礼だ」という批判が殺到した。いわゆる「炎上」という事態で、この記者の実名や顔もさらされた。

メディアは既得権益者か

君が代条例については批判も多いが、橋下氏が問題提起した教育委員会のあり方については、いま話題となっている大津市のいじめ問題をみても、タイムリーな指摘だったと思う。

教育委員会制度が形骸化していることは教育を取材した記者にとっては常識中の常識。ただ、それを問題視したことはなく、「と、したもんだ」と分かったような風で済ませてきた。そこを橋下氏に突かれた。「選挙で信任を得た首長が教育に関与してなぜ悪い」という理屈は説得力があった。

橋下氏はよくインテリ批判を展開する。そのターゲットとされるのは朝日新聞、とくに社説である。「上から目線」でも熟知り顔で批判する。それが匿名であることも橋下氏にとって好都合だ。「リスクを負わず、自分だけが安全地帯に身を置いている。それでは何を言っても説得力がない」。そんな風に見えるようになっている。

背景には、既成メディアに対する人々の不信感があると思う。大手新聞社は自分たちの味方ではなく、政治家や大企業と同じ既得権益を享受する側にあるのだ、という意識だ。ならば、読者との壁をどう打ち破るのか。デスクを中心に記者が苦心を重ねた。当時、デスクの引き継ぎ帳にこんな言葉があったことを覚えている。「負けねーぞ。ほんとは圧倒的に負けてるけど」

取材班が確認したのは原点に返ること

【講師略歴】

平山 長雄（ひらやま・たけお）

福井県敦賀市出身

福井県立敦賀高等学校卒業

一九八四（昭和五十九）年三月、明治大学法学部卒業

同年四月朝日新聞社入社。北海道報道部員として札幌に赴任。以降、社会部記者、政治部記者など

二〇〇八（平成二十）年四月 神戸総局長

二〇一〇（平成二十二）年四月 大阪本社社会部長

二〇一二（平成二十四）年六月 東京本社編成局長補佐、朝刊の編集長を交代でつとめる。

大阪社会部長時代の平成二十二年九月、大阪地検特捜部の証拠改竄事件を取材班がスクープ。新聞協会賞を受賞。

だった。識者談話に頼るだけでは限界があるのは目に見えていた。現場で日々格闘する人の言葉が最も説得力を持つはずだ。取材こそ新聞社の強み。当たり前のことだが、追い込まれて改めて原点に立ち返ろうと確認したのだ。

逆転の発想もあった。相手を批判しようと思つたら、いったん肯定するところから出発する。橋下ファンでも納得できるような批判記事をめざした。さらに、仮想読者を橋下市長と考えたらどうだろうか、とも。

橋下氏がヒステリックな反論をしたら負け。「自分の考えとは違うが一理あるかもしれない」と思わせたら勝ち——。そう狙って仕上げた記事が、君が代条例でクビを宣告された高校教師の人となりを取りあげた「不起立は罪ですか」だった。

不起立教員のことを取り上げると「なぜそんな教師の肩を持つのか」という反応がたくさん返ってくる。朝日の問題意識を共有する人は今や少数派である。それでもやっぱりこの先生のことを書いておきたい。そんな前文を書いたところ、読者から共感する反応がたくさんきた。

証拠改竄事件と橋下報道を通じて、報じる側と読者との間に深い溝が刻まれたつあることを思い知った。十年一日、いや半世紀以上、戦後民主主義にあぐらをかき、「と、し

たもんだ」報道を続けてきた結果、メディアは既得権益者側にあるとみられているのではないだろうか。

取材現場がいやおうなく変化を迫られているなかで、新しい新聞の姿、報道のかたちを求めてもがく様子も含め、取材過程を透明化・可視化することも、読者の信頼を回復する一つの手立てかもしれないと考えている。

◆広報委員会からのご案内(理事会議事録)

日時…平成二十四年七月十八日(水) 十七時
場所…明治大学「紫紺館」(二F会議室)

○新推薦会員承認の件

丸山委員長から、入会薦書が提出されている福田浩志氏、打出満氏の二名について、組織・会員増強委員会では入会を承認したという報告があり、全員異議なく承認された。

○大学役員・特別会員への推薦について

坏専務理事から次のような説明があった。

特別会員というのは、連合駿台会発足(茗水クラブと明友クラブが合併)後は、設けていない。組織上にもはつきりとしたカテゴリーはないが、年会費は無料で都度会費だけは負担していただくことになっている。ということで、論点は、大学の運営に携わる人たちを、当会員として、特別に「迎え入れるべ

きか、否か? ということになる。ちなみに、当会の「入会資格要件」は下記の通り。

*

「会員は本会の存続基盤であり、多くの新会員を迎えることは、本会の発展に欠かせません。同時に、会員の質の向上を目指し、より素晴らしい会とするために、本会への入会資格要件として、基本的に次の条件を満たす事を新会員入会の条件としています。

① 上場、公開企業の役員、及びそれに準ずる人

② 資本金三千万円以上のオーナー経営者

③ 弁護士など資格のある人の中で、その組織の役員、及びそれに準ずる人

④ 評論家、芸術家などの著名人、又は会員

として迎えるに相応しいと思われる人

※(注)上記はあくまでも目安であり、絶対条件ではありません。また、地方自治体などの議員等は原則として、入会要件を満たさないものとしています」

以上を踏まえ、本日の理事会で決定するわけではないので、理事会メンバーの忌憚のない意見を伺って参考にしたいと思う。

これに対して、以下のような意見が交わされた。

・大学役員というのは明大卒でなくても含まれるのか?

↓大学役員というのは、直接経営に関わる人

だから、明治の卒業生でなくても含まれる。役員というのはどこまで含まれるのか? :

↓一応理事までを対象とし、副学長・学部長は含まれないと考える。

・当会は経済人の団体ということだったが、それに「大学という組織の経営者」という新しいカテゴリーが加わったと考えれば、問題ないのではないか?

・規約の中に特別会員というのはどう定義されているのか?

↓はつきりとした身分規定はないが、第三章・第7条に、名誉会員、特別会員は前項の規定(年会費を納付する)によらず、別途定めるこのとする、と書かれている。

・役員在任中だけということになるのか?

↓大学の役員という立場で特別会員になるので、退任されたら普通会員として会に残るか、退会されるかは、ご本人次第と考える。納谷前学長は、三月末日をもって退会された。

・入会の意思があれば入っていただいて構わないが、年会費は徴収すべきではないか? ↓その意見に則ると、他の会員と同じように

入会推薦書(推薦者二人)が必要になり、委員会に諮り、理事会で承認を取ることが筋論ではないかと思う。

本日の理事会で出された皆さんの意見を踏まえ、次の理事会までに素案をまとめたい。

○名簿への写真掲載について

名前はわかっているけれども顔がわからないという声が多いので、顔と名前が一致するように、今回発行する名簿には写真を掲載したい。ただし個人情報問題に関わるので、情報のみだりに流出しないよう、従来以上に名簿の管理はきちんとしてもらうように関係方々に要請する。

写真に関しては、最近入会された方は、申込書に添付されたものを使用するが、古くからの会員は写真がない方も多いので、なるべく新しいものを提出してもらいたい。また、掲載を希望しない方については、載せないままの形で名簿を作成する。いずれにせよ、写真掲載許可の可否も含め、近日中に事務局から詳細をご案内したい。

これに関して、全員一致で承認された。

以上

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。
(敬称略・到着順)



福田 浩志
昭和三十二年・商学部卒
(株)ウエマツ
代表取締役社長
東京都豊島区在住



打出 満
昭和四十七年・経営学部卒
(株)明大サポート
代表取締役社長
神奈川県海老名市在住

◆明大ニュース

●文部科学省共催

「大学教育改革地域フォーラム」

明治大学は七月十三日、文部科学省との共催による「大学教育改革地域フォーラム2012 in明治大学」を駿河台キャンパス・アカデミーコモンで開催した。「なぜ日本の学生の学修時間は短いのか」をテーマに、平野博文文部科学大臣、教員や財界人、学生たち約二百人が闊達に意見を交わした。

●私立大学情報教育協会主催

『教育改革FD／ICT理事長・学長等会議』

私立大学情報教育協会(会長 向殿政男・理工学部教授)は八月七日、駿河台キャンパスリバティホールで「大学教育の質的転換を図る主体的な学修の実現を考える」をテーマに、教育改革FD／ICT理事長・学長等会議を開催。八十大学・短期大学から約百五十人が参加した。

●校友会二〇一二年度定時代議員総会開催

明治大学校友会(会長 向殿政男・理工学部教授)は七月二十九日、駿河台キャンパスリバティホールで二〇一二年度の定時代議員総会を開催した。代議員総会は校友会の会則が定める重要事項を審議・決定する会議で、当日は代議員総数六百二人中、委任状を含め五百二十四人が出席。大学からは来賓として、日高憲三理事長、福宮賢一学長をはじめ役員が出席した。

●新たな地域支部と海外団体へ会旗授与

明治大学は、校友会が本年度に新たに承認した三団体へ会旗を授与した。今回承認された三団体は、①神奈川県西部支部に所属する「座間地域支部」、②インドネシアの「紫紺の集い・ジャカルタ会」、③東京都多摩支部に所属する「清瀬地域支部」。「座間地域支部」、「紫紺の集い・ジャカルタ会」の両団体は五月十二日に開催された校友会支部長会。本部員会合同会議で、「清瀬地域支部」は六月十六日に開催された校友会支部長会で、それぞれの団体の設立が承認された。

●高校生に聞いた

「志願したい大学」ランキング

四年連続で第一位(関東エリア)獲得

リクルート社が七月二十四日に発表した「高校生に聞いた大学ブランドランキング二

○一二(進学ブランド力調査)において、明治大学は四年連続で関東エリアの「志願度ランキング」第一位となった。この調査は、リクルート社が関東・東海・関西エリアの高校三年生、七万四千人を対象に実施し、約一万人の回答を集計しまとめたもので、本年度で五回目の発表となる。

今回の調査で明大は、対象となる関東エリア三百七大学の中で、男子生徒の志願度ランキングでは四年連続の第一位を獲得。また、文系だけでなく理系部門の志願度ランキングでも第一位となり、文理ともに「志願したい大学」の第一位に選ばれた。

イメージ項目別のランキングでも、「親しみやすい」の項目で第一位を獲得したほか、「校風や雰囲気がい」「就職に有利である」「教育方針・カリキュラムが魅力的である」「学生の面倒見が良い」「おしゃれな」の項目で昨年度よりも順位を上げた。

●オープンキャンパス来場者

過去最高を更新中

二〇一三年度入試に向けた八月の「明治大学オープンキャンパス二〇一二」が、駿河台・生田の各キャンパスで開催され、過去最高の五万二千人余りが来場した。九月十五日の和泉キャンパスでの開催を待たずに昨年度の来場者数を上回り、高校生に聞いた「志願

したい大学」ランキングで四年連続一位を獲得したことを裏付ける結果となった。

●二〇一三年度「年度計画書」の策定に向け

学長、教務理事、学務理事ヒアリング実施

福宮賢一学長は、飯田和人教務担当常勤理事、三木一郎学務担当常勤理事、学長スタッフ、関係役者らとともに七月十九・二十日の両日、駿河台キャンパス大学会館八階会議室で、予算管理要領に基づく「二〇一三年度教育・研究に関する年度計画書」の策定に向け、各学部大学院等で作成した長・中期計画書の重点項目を中心に数学にかかわる二十八機関に対してヒアリングを行った。

●国家公務員総合職試験に十四人が合格

人事院は六月二十五日、中央省庁の幹部候補となる平成二十四年度の国家公務員採用総合職試験の合格者を発表した。明治大学からは十四人が合格(前年度十一人)し、うち女子は七人(前年度なし)が合格した。明大の合格者の試験区分別の内訳は、院卒者試験で行政二人(一)、工学一人の計三人(一)。大卒程度試験で政治・国際二人(一)、法律四人(一)、経済二人(一)、工学一人(一)、化学・生物・薬学一人、森林・自然環境一人の計十一人、合計十四人が合格した。(※カッコ内は女子で内数)

従前の国家ⅠⅢ種試験が見直され、人材供給構造の変化などを踏まえ、多様で有為な人材確保を目指し「総合職試験」「一般職試験」に再編された新試験制度の下、初の実施となった今年度の試験の申込者数は、二万三千八百八十一人(前年度旧制度国家Ⅰ種比三千六百八十六人減)、合格者数千三百二十六人(同六十四人減)で、申込者総数に対する倍率は十八・〇倍(同一・八ポイント減)となった。女性の合格者数は三百六人(同三十二人増)。合格者の出身学校数は九十三校で、十人以上の合格者を出した大学は二十二校だった。合格者は、最終合格者発表日の翌々日から行われる各府省による面接などを経て、おおむね二〇一三年四月に採用される。

●植物工場基盤技術研究センター 施設園芸・植物工場展二〇一二で最新研究を紹介

明治大学植物工場基盤技術研究センターは、東京ビッグサイトで七月二十五日から三日間に渡って行われた「施設園芸・植物工場展二〇一二」にブースを構えて最新の研究紹介を行った。同展へ参加した研究機関・会社は二百十九に上り、延べ来場者数は約三万七千六百人だった。

●群像新人文学賞受賞の片瀬チヨルさん(文4)に、文学部特別表彰

文学部（林義勝学部長）は、小説『泡をたき割る人魚は』で第五十五回群像新人文学賞（小説部門）優秀作を受賞した片瀬チヲルさん（文4）に文学部特別表彰を授与した。

●**明中高創立一〇〇周年 初代校長・鶴沢総明先生の墓前で決意を新たに**

明治大学付属明治中学校・高等学校の金子光男校長（政治経済学部教授）は八月二日、坂口泰通副校長、田中徹太郎高校教頭ら関係者十一人とともに、本年三月に創立一〇〇周年を迎えた同校のさらなる発展を誓うため、青山墓地（東京港区）に眠る初代校長の鶴沢総明先生の誕生日に、先生の墓碑を参拝した。

●**大地震を想定し避難訓練を実施**

明治大学は七月二日、駿河台キャンパスで震度6弱の地震が発生したことを想定しての避難訓練を実施した。対象となったのは、リバティタワー九階の五つの授業、約二百人の学生で、「大地震発生時の避難マニュアル」の要領に従い、教職員の誘導よりスムーズに避難する訓練が行われた。

●**中野キャンパス事務部が発足催**

学校法人明治大学理事会は七月四日、二〇一三年四月の中野キャンパス開設に先立ち、

現在の中野キャンパス開設準備室を中野キャンパス事務部として改編し、同部の下に、中野キャンパス事務室、中野教務事務室、中野教育研究支援事務室の一部三事務室から構成される中野キャンパス事務部を翌五日付けで設置した。

●**「明治大学Walker」**

中野キャンパス版を発行！

このたび、中野キャンパスを周知するため「明治大学Walker」が発行された。これは「東京Walker」編集部とのコラボレーションによるもので、オールカラー十六ページ五万冊が作成された。

●**ラッピング電車でGO！**

中野キャンパスの開設と総合数理学部（仮称）設置の周知を行うため、七月九日から八月五日までの四週間、JR総武線電車（一編成十二車両）のラッピング電車が運行された。

●**「明大茶」が新登場！**

明治大学ブランドのお茶「明大茶」が八月二十日に明大サポートより発売された。厳選された国産茶葉一〇〇%を使用した安全でマイルドな味わいのお茶だ。しかも、「明大茶」購入の一〇%が「明大サポート奨学金」として本学に寄付される仕組みとなっている。

●**坂東玉三郎氏を招き**

特別講演会「こころとかたち」を開催

文学部は七月二十三日、このたび重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された歌舞伎俳優の坂東玉三郎氏をゲストに迎え、特別講演会「こころとかたち」を駿河台キャンパスで開催した。会場に集まった本学の学生をはじめとする約三百人の受講者の前で、玉三郎氏は、現代社会の教育が抱える問題点や、歌舞伎の舞台上の心がまえを神山彰文学部教授との対談形式で語った。

●**世界に広がる協定校**

三十八カ国・地域百九十三大学と協定
明治大学は、ブライトン大学、ベトナム国家大学ハノイ外国語大学、南ユタ大学と学部間協力協定を新たに締結した。協定校は三十八の国と地域で、百九十三大学（学部間協定など含む）となった。

●**海外メディアも注目する黒川農場**

都市農業への取り組みに

七カ国十二人の記者集まる

明治大学は八月三日、フォーリン・プレスセンターが主催する海外プレス向けツアー「農業新時代―若い力が創る持続可能な強い農業」で、ブリーフィングおよび黒川農場の取り組み紹介を行った。このツアーは、新鮮

で安全な農産物の都市住民への供給のみならず、災害に備えたオープンスペース確保、ヒートアイランド現象の緩和といった機能や効果も備えた都市農業。首都圏という一大消費地のなかで、需要に合わせた生産・販売や付加価値を高めたビジネスを展開する川崎市の都市農業の取り組みに焦点をあてたもので、七カ国、中国、台湾、シンガポール、スイス、フランス、ドイツ、カナダから、メディア十社、十二人の記者が参加した。

●海外学生向け情報サイト「Your Guide to Meiji」

留学生、十六カ国・二十人の情報発信

明治大学は現在、四十の国と地域から、約千三百人の留学生を受け入れている。「どうして、日本に留学しようと思ったのか」「どんな、夢を持って、明治大学への留学を決めたのか」「日本での生活で驚いたこと、苦労することは何か」。この海外学生向けのホームページでは、十六カ国（マレーシア、ラオス、ベトナム、インドネシア、コンゴ民主共和国、ロシア、ルーマニア、イギリス、ブルガリア、イタリア、トルコ、ブラジル、アメリカ、中国、台湾、韓国）、二十人の現役留学生が、刺激に溢れた留学生活について、エッセイと写真で紹介している。

●英語圏大使館合同留学フェアを初開催

明治大学国際教育研究所は七月十四日、駿河台キャンパス・アカデミーコモン二階で「英語圏大使館合同留学フェア」を初めて開催した。これは、アメリカ、イギリス等の大使館や公的機関など計二十一団体が相談ブースを設置して個別相談に応じるほか、国際経験豊かな講師陣による「留学のすすめ」を講演するもので、明大生のみならず他大学生・中高生・社会人合わせて約五百名が来場。

●政治経済学部・海野素史教授

米大統領選挙最前線レポート配信はじまる

海野素史教授（政経学部）は、ことし三月から一年間の予定で、アメリカに滞在し現在ワシントンに隣接するバージニア州北部でオバマ選挙対策事務所に入り、内側から大統領選挙を観察・研究を行っている。そのアメリカ大統領選挙に関する最前線レポートが、全国五十二の新聞社のニュースと共同通信の内外ニュースを束ねた総合ウェブサイトATNEWS（よんななニュース）にて、毎週掲載されることになった。

●二〇一二年第一回マスコミ交流会開催

明治大学広報戦略本部は七月二十七日、二〇一二年第一回目となる「マスコミ交流会」を駿河台キャンパスのリバティタワー二

十三階で開催した。講演会と懇談会の二部構成で、本学役員・役職者ら二十人とマスコミ関係者約四十人が参集し、明治大学の最新動向などについて情報交換した。

●天童市教育委員が来訪

福宮賢一学長は七月二十四日、駿河台キャンパス学生会館八階で、山形県天童市から沼澤政辰教育委員長はじめ教育委員五人の訪問を受けた。

●宇崎竜童氏・藤江昌嗣副学長（社会連携担当）が石川雅己千代田区長を訪問

七月十二日、藤江昌嗣副学長（社会連携担当・経営学部教授）が、宇崎竜童氏（お茶の水JAZZ祭総合プロデューサー）および石井久義氏（お茶の水JAZZ祭実行委員長）とともに、石川雅己千代田区長を表敬訪問した。

●北島忠治ラグビー祭二〇一二年開催

体育会ラグビー部による『北島忠治ラグビー祭』が七月八日、八幡山グラウンドで開催された。開会時には朝まで降っていた雨も上がり、ラグビースクールの子どもたちやその保護者、ラグビー部OB、ファンら多数がグラウンドに詰めかけ、思い思いにイベントを楽しんだ。

●夏休み科学教室を開催

理工学部は八月九日、社会貢献を目的とした「夏休み科学教室」を生田キャンパスの各校舎を使用して開催した。小学校一年生から高校三年生までを対象として、事前に申し込みをした約六百人（保護者含む）が参加した。

●大学図書館長のイスをめざせ！

小、中学生を対象に「一日図書館長」体験イベント開催

中央図書館は七月三十日、小、中学生が一日図書館長になり、図書館の仕事を体験するイベントを行った。多数の応募の中から、中学校一年高橋愛美さん、小学校六年石川珠里さん、小学校五年中嶋美侑菜さんの三人が選ばれた。

●福島県新地町

多くを学んだ学生ボランティア

学部間共通総合講座「東日本大震災に伴うボランティア実習」履修学生十四人と商学部の鳥居高ゼミナール有志五人の計十九人は、八月十日～十四日の五日間、福島県新地町で東日本大震災による被災地復興支援を目的とした学生ボランティア活動を行った。

●水野ゼミナール

復興支援品販売「ほくほく東北」オープン

商学部の水野勝之ゼミナールは八月二十

一日、東北被災地復興支援活動の一環として、東北のお菓子などの産品を販売する「ほくほく東北」をオープンした。東日本大震災の風化を防ぎ、あらためて被災地に心を寄せるとの取り組み。店舗は、JR神田駅から五分程の場所で、昼しか営業しない弁当店の施設を間借りする。同学部が六年前から神田の空き店舗を活用して、三浦市の特産品の販売や観光情報の発信などを行っている『なごみま鮮果』の近くに位置しており、先輩たちの調査研究やノウハウ・データの蓄積を生かし、近隣の高齢者宅へ宅配事業も行い、都会型孤立の解決するコミュニティ創出も目指す。

●阪井ゼミナール

三陸・大船渡町夏祭りに出店

法学部の阪井和男ゼミナールとボランティアセンターを通じて集まった明大生約六十人が、八月三・四日の両日にわたり岩手県大船渡市で行われた大船渡町夏祭りに協力、出店した。これは阪井ゼミナールが活発に行ってきた大船渡市復興支援の一環となるもの。夏祭りの運営協力のほか、店の設営から撤収までを全て自分たちで行い、白地のうちわに自由に絵やメッセージを書いてもらう「うちわレター」を販売した。

●ロンドン五輪 海老沼「銅」メダル

海老沼匡（えびぬま まさし、二〇一二年商学部卒）が七月二十九日、ロンドン五輪柔道男子66^{kg}級で銅メダルに輝いた。

●卓球部インカレ連覇

二年連続グランドスラムへ王手

卓球部は七月五～八日の四日間、北九州市立総合体育館で行われた第八十二回全日本大学総合卓球選手権大会（＝インカレ）男子団体で、二年連続十四回目の優勝を果たした。春季リーグも連覇している卓球部は、この九月から行われる秋季リーグを制すると二年連続「グランドスラム」の偉業を達成する。

●明治大学を含む都内六会場

UNHCR難民映画祭開催

明治大学は九月二十九日から開催される「第七回UNHCR難民映画祭」に参加し、難民問題への理解促進と関心喚起を目的とする映画五本を、駿河台・和泉キャンパスで上映する。明大の二会場の他に映画祭が行われるのは、青山学院アスタジオ、セルバンテス文化センター東京、イタリア文化会館、グローバルフェスタJAPAN二〇一二（日比谷公園）で、十月八日まで九日間にわたって都内六会場で開催される。

<http://unhcr.refugeefilm.org/2012/>

●OB社長

▽第一商品株(証券) 土肥章氏(一九七三年経営学部卒・六十二歳)

●訃報

三木睦子(みき・むつこ)顧問が七月三十一日、逝去。九十五歳。
三木氏はアジア夫人友好会長、国連婦人会長、国際教育交流協会会長。二〇〇五年より顧問。

青木信樹(あおき・のぶき)顧問、校友会名誉会長が八月十一日、逝去。九十八歳。
青木氏は一九三八年明治大学政治経済学部卒業。名エングループ代表取締役会長。元評議員会議長。一九九六年より顧問。

●連合駿台会寄付講座

「今、なぜ、論理的思考による問題解決力が求められるかを聴く」

日時…十月十日(水) 十九時～二十時三十分

※開場十八時三十分

講師…今井繁之氏

会場…駿河台キャンパス・アカデミーコモン

二階「ビクトリーフロア眺の鐘」

受講料…連合駿台会会員 無料 一般 千円

定員…先着二百名

申込…事前予約制・リバティアカデミー事務局

☎〇三―三二九六―四四二三

●第十五回ホームカミングデー

学友・家族とともに母校へ

母校明治大学は、校友の皆さまをあたたくお迎えし、校友同士の親睦を深め、校友と現役学生が交流する、全卒業生対象の「第十五回ホームカミングデー」を十月二十一日(日)に駿河台キャンパスで開催する。

●学園祭にお出かけを

秋の学園祭に向けて、学生たちの準備が進んでいる。例年どおり、「明大祭」は和泉キャンパスで十一月一～三日、「生明祭」は生田キャンパスで十一月二十三～二十五日に開催される。

◆駿台トピックス

八月三日、明治大学新施設見学会が開催されました。広報委員会委員より、施設の案内と感想をお届けします。

●和泉図書館

半世紀前の入学当時を思い出し、興奮気味で和泉校舎に到着。まずは五月オープンで和泉の顔になった新図書館へ。一階は講演会、多目的使用のホール、二階から四階まで吹き抜け、ガラス張りの積層集密書庫でテーブル席、ブース席など合わせて千二百席以上の閲覧席。スタイリッシュな外観とホテルのラウンジの様な開放感あふれた館内。蔵書数は現

在三十三万冊で、いずれ六十万冊に増やす予定。またカフェを併設しておりコーヒーを飲みながら読書を楽しめる快適な、正に「入ってみたいくなる図書館」です。校友会員も登録すればいつでも利用できます。そして一行はパソコン教室のメディア棟、数多くの五輪選手を生んだ先進設備の屋内外の体育館を喚声を上げながら見学し、黒川農場へ。

(文責・有賀隆治)



●黒川農場

私たちが学生の頃、富士吉田や千葉県本田にあった農場に代わり、都市型農場として生田に近い黒川農場は四月開場。広大な敷地と本館、温室などの施設は、一三〇周年記念事業計画として先端技術を導入し、生産効率の高い栽培システムを追求した体験型実習教育の場として期待されている。われわれが訪れたときも外国人を含む団体の視察中であり、内外の関心の高さを感じた。夏期実習の学生たちも励んでいたが、せつかくの施設を大いに活用し成果を挙げ、さらなる発展を期待したい。

(文責・原田 榮)

●生田校舎

生田校舎には、これまで生田駅から急勾配の坂を上らなければ行けませんでしたが、地域産学連携研究センターの設立に伴いエスカレーターが設置され、便利になりました。キャンパスに到着すると、理工学部の高層校舎群が目の前に現れ圧巻です。校舎の建て替えは現在も続いています。最新の教育研究設備のもと、理工学部および農学部から世界で活躍する人材が育ち、世界に誇れる基礎研究、産学協同研究が推進されることを願ってやみません。

(文責・藤巻伴英)

◆七月例会出席者

青木孝、秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、池田一義、池田勝也、池田泰弘、石川均、石原道勝、泉山和久、植木榮、上田興文、上田利昭、上西紘治、内田八郎、海野美津雄、大石哲也、大原幸男、大村託現、小倉忠、落合由行、小野寺弘三、勝保正義、菊部彰夫、河合秀二郎、河原啓介、河村博、神沢瑞至、北野大、木野幸士、木下重次郎、清野明男、河野典男、小柴和弘、同ご友人二人、駒田一郎、小山修、根田吉雄、斉藤春夫、斎藤柳光、坂田英夫、笹田学、佐藤和正、佐藤健、眞田瞳、眞貝達朗、同ご友人、甚野捷、鈴木紘一、宗邦雄、相臺志浩、園田英次、高澤徹、田代恭一(代理)、谷慈義、玉田健治、田村駿、天童美徳、同ご友人、富田正一、中川敏洋、中西幹育、中村豊、並木洋一、西尾勝治、西山武夫、二宮充子、二宮忠、野口昌宏、蓮池信之、長谷川進一、濱崎治、林威樹、原田榮、比良田幸雄、広瀬康雄、福田和彦、福山紘太郎、富士豊、藤代耕一、藤巻伴英、舟橋達彦、星野範仁、同ご友人、前川一郎、松崎優子、同ご友人、丸山律夫、宮下隆、向井眞一、六井元一、村岡健、室井恵明、森一朗、森川雅人、安河内究、山口政廣、山田朝彦、山田勝、山田幸夫、結城康郎、義江邦夫、吉村國廣、渡辺紀之、渡邊洋三

【編集後記】

今年の夏は、何故か気の休まらぬ日々であった。連日の猛暑や熱帯夜のせいでもない。

七月末のロンドンオリンピックを幕開けに、日本選手団、わけても明大関係者の活躍が気になった。結果は日本が三十八個のメダルを獲得し、史上最高となった。大学関係者は九名参加で、海老沼選手の銅一個に止まった。期待された選手が多かっただけに残念であった。

お疲れさまと申しあげ、捲土重来(けんどこしようらい)、次の機会を目指して精進し頑張ってください。文武両道を行く母校明大のためにも。

オリンピックの一喜一憂のあと、高校野球で締めくくるならばさわやかであったのだが、このあとがいただけでない。竹島に韓国の大統領が上陸、これを機に日韓の外交は大きく損なわれた。これに追い打ちをかけるように、尖閣諸島には香港人の上陸問題が起きて、国家の権威を傷つけられる状況となり、大きな論議を呼んでいる。国家として基本的なあり方が問われている。国民一人一人も自問し再考したいもの。

これから起こるのが政局がらみのポイント、総選挙であろう。一体どんな結果になるものやら、考えると気が重くて休まらない。

やがて長かった夏も終わる。そしてこの国に一日も早くさわやかで、実り多い秋を迎えてくれるように心から祈り期待したい。

そんな中で、ロンドンパラリンピックで、秋山里奈選手(法学研究科二年)が、大会新記録で金メダルを獲得したことは、唯一と言えるほどの明るい話題であった。彼女の努力と勇姿に、心からエールを贈りたい。

(原田 榮)